

社会福祉協議会が実施する生活福祉資金貸付制度における相談支援について

- 援助の主体的側面について -

横浜市立大学都市社会文化研究科 博士前期課程 小山英郎 (008823)

キーワード3つ: 生活福祉資金・貧困問題・支援の主体的側面

1. 研究目的

私は平成12年4月から市町村社会福祉協議会で働いている。このうち、平成23年4月から25年3月までの2年間、生活福祉資金貸付制度における窓口業務に従事した。これは、低所得者を対象に資金の貸付を行っているもので、現行では、生業や障害者の社会参加等を目的とした福祉資金、高校以上の教育に対しての教育支援資金、失業者への生活費の貸付を目的とした総合支援資金、一時的な生活費の支払いのための緊急小口資金、高齢者世帯へ自己所有の土地建物を担保に生活費の貸付を行う不動産担保型生活資金といった内容を持っている。社会福祉協議会は第2のセーフティーネットを自負しているが、私自身は支援の難しさ負けそうになりながら、砂を噛むようなやるせなさを感じ、ただただ2年間を過ごしてきた実感を持った。そのような状況から、相談員たちの離職は多く、職員の中でも社会福祉協議会で一番やりたくない業務だと囁かれ、非常によくはない状況にある。平成27年度からは生活困窮者支援事業が施行することとなり、ある意味では生活福祉資金の窓口担当者の業務は楽になるのかもしれないが、この本質はより複雑化し、何も解決しないだろうと推測している。このような理由で、私は研究対象に生活福祉資金を定め、これをできる限り説明したいと考えている。

2. 研究の視点および方法

この研究にあって、私は岡村重夫の理論を分析道具として使用することにした。これによれば、社会福祉の支援には支援の主体的側面と客体的側面の二面性がある。専門分業化された現代社会において、多くの場合、社会制度や生活関連サービスに代表される客体的側面が有効に働くことが多い。しかし、一人の社会人として生活を考えたとき、数多くの客体的側面から本人に要求される行動は多いし、その要求は同士を成り立たせるため、本人の生活に矛盾が生じることがあるため、本人の主体的側面からはこれを批判的に統合していくことにある。しかし、社会福祉の支援を必要とする人は、これらの過程において、何らかの理由・事情により統合することに失敗している。このため、そもそも社会福祉の援助は本人の主体的側面から客体的側面を統合して、社会生活を再建する過程にその本質があるといい、ソーシャルワーカーは、支援を必要とする対象者と、この過程をともに行動すると主張している。

私はこの考えに賛同する。しかし、援助を求めてきた多くの相談者は、援助者である私の期待とは異なり、生活福祉資金貸付制度の現実性と保護的機能のみ求める。つまり、お金さえ引き出しさえすれば、それでいい。多くの事例でそのような保護的機能のみを用い

たとしても、問題は何一つ解決されたものではなく、先送りにされ、早晚、破綻するのは目に見えており、「例えお金があったとしても、この人たちは生きていくことができない」と私は強く感じた。問題は、援助を必要とする相談者たちが社会生活における客体的側面と本人が認識している主体的側面の矛盾をどのように捉え、どのように統合に失敗しているのか、あるいは本人の主体性をいかに豊かにはぐくみ、客体的側面を統合していく過程を明らかにすることだろうと考える。

3. 倫理的配慮

主体的側面の支援については、制度を利用した本人に聞いてみるのが一番だと考えているが、事例研究的な発表に関しては、支援対象者本人や社会福祉協議会への調査ができていないため、私自身の実務経験を整理している段階である。この件については、現状では事例そのものを用意できないので歯切れの悪い議論になることは予想されるが、無理強いされる客体的側面と一般的な社会人としての評価として主体的側面から議論できないかと模索している。そこで調査は専攻研究に対する文献調査が中心となるため、研究発表については、日本社会福祉学会研究倫理指針に従い、文献を適切に引用することとする。

4. 研究結果

過去の先行研究に対する文献調査から主体的側面を育む支援のあり方を提示したい。

5. 考察

私は社会福祉における自己決定は、その起源から決して自由な自己決定が存在したものととは考えていない。自己決定と言っても、例えば、職業選択の自由とあって、勉学などの努力をして社会的地位の高い職業に就くとは性格を異にする。社会福祉の起源が治安維持のための監獄をモデルとした収容施設であったことから、誰も好き好んで失業し、病気や障害を得るわけではない。そのようなつらい立場、弱い立場は客体的側面として外部から評価され、無理強いを強いられるところからはじまり、それをいかに主体的側面から統合し、生活設計するかという本旨である。そうであるならば、自己決定は受容の過程であり、自己変革とソーシャルネットワークの獲得過程であるということができないだろうかと考えている。